

弥生三月、季節が変わり、春の訪れを感じさせる今日の佳き日、第五十八回國學院大學榎木高等学校卒業式を挙げて下さることは大きな喜びであり、厚く御礼申し上げます。

三四一名の卒業生の皆さん、卒業おめでとう。今日という日は、皆さん一人ひとりが本校の建学の精神である「国体の講明」と「徳性の涵養」のもと、勉学、部活動などに、日々たゆまぬ努力を積み重ねてきた結果であることは言うまでもありません。しかし、これまで皆さんの成長を見守ってこられたご家族、先生方、友人、部活動の先輩・後輩、そして地域の方々など、多くの人たちの励ましや支えがあって今があることを忘れないでください。

さて、卒業生の皆さん、卒業は高校生活の終わりの時であるとともに、新たな人生への旅立ちの時でもあります。このような旅立ちの時にあたり、私が三年間、皆さんに節目節目に話してきたことの中から、特にこれからも続けてほしい三つのことを取り上げ、はなむけの言葉にしたいと思います。

まず一つ目は、「夢を持ち続け、その実現に向かって努力する」ことです。

皆さんは、三年前の入学時に、高校生活の決意を作文に書きましたが、その作文を集めた『拓く』という文集を読み返してみました。その中で、例えば海外の人々と関わる仕事や医療関係の仕事に就くこと、ラグビー日本代表、プロ野球選手になることなど、皆が希望を胸に、それぞれの夢を語っていました。新たな夢を見つけた人もいられるかもしれませんが、今もしっかりと夢を持ち続けているのでしょうか。

夢とは行動によって何かを実現しようとする願いであり、未来に挑む原動力です。しかし、簡単に実現するものではなく、時に思い悩みながらも試行錯誤を続ける模索の過程でもあります。皆さんは、世界の舞台でも活躍した二人の先輩、元プロ野球選手 渡辺俊介氏とラグビー日本代表の田村優選手の講演を聴く機会がありました。その二人が発したメッセージに共通する点、それは、「夢を実現させるためには、常に全力で準備すること、そして、あきらめないこと」でした。挫折があったとしても、あきらめず、自らの力で、試練をくぐり抜けようとする行為そのものに希望は宿るのです。まだ、皆さんは道の途中かと思いますが、叶うのをただ願って待つのではなく、自ら主体的に行動し、その実現に向けて努力を続けていってください。夢は必ず叶います。

二つ目は、「生涯に渡って学び続ける」ことです。

皆さんが未来の担い手として生きていくこれからの社会は、急激な変化を遂げる先ゆき不透明な社会と言われます。グローバル化、高度情報化、少子高齢化など様々な社会課題が挙げられます。時代の波に押し流されることなく、自分らしく生きていくためには、未来を切り拓く力、つまり課題を自ら解決する力や想像力・判断力・表現力が必要であると言われています。細かく言えば、英語の4技能、IT機器を使いこなせる技術などもそうでしょう。しかし、それらが活きるのは、ものごとに挑戦する姿勢や学ぶことへの意欲を持つことが、根幹にあってこそなのです。

「Stay Hungry, Stay Foolish」、これは昨年度皆さんに話したアップル社の創始者であるスティーブ・ジョブズ氏の言葉です。彼が言いたいことは「常に物事に向かって挑戦し続けよう、常に探究心を持ち続けよう」ということであると思います。変化が激しく、

予測不能な社会、経験したことがない様々な課題が待ち受けている社会を生きる皆さんに、大切にしてほしい姿勢です。

ところで、昨年10月、台風19号が多く地域・人々を襲いました。この栃木市の被害も甚大なものであり、学校も数日に及ぶ休校を余儀なくされるなど、大きな自然災害が私たちを襲う「苦難の年」となりました。しかし、どのような状況の中にも希望の光はあるものだと、あらためて気づかされました。まずは、私のところに届いた手紙の一部を紹介します。「この度の台風被害に対しまして、昨日貴校の生徒さんたちにボランティアとして、当自治会内の災害ゴミの搬出にご協力いただきました。素晴らしいチームワークとてきぱきとした動きで、ほとんどのゴミを搬出することができました。感謝申し上げます。このようなことを体験した生徒の皆さんが、他人のことを思いやる立派な人に成長してくれることを望み、また、これからの学業、部活動に頑張ってもらえるように応援していきたいと思います」、他にも同様の手紙が何通か寄せられたり、何人もの方にお礼の電話をいただきました。中には、深々と頭を下げてお礼をされた方や涙を流しながら手を握って「一生応援する」と話された方もいらしたと聞いています。まさしく、その光とは、実にたくさんの人たちがボランティアに携わりましたが、本校でもラグビー部、野球部、柔道部を始め、生徒たちが市内の清掃を、また生徒会やインターアクトクラブが募金を行うなどのボランティア活動でした。

もちろん、苦難に負けず再び前に進む人々の「強さ」にも心打たれましたが、そうした行動が多くの人たちの心に光をあてたのです。「思いやり」とか「親切心」を超えた「他のために」という心が、いかに大切なものであるかを皆が学びました。三つ目は、「『他のために』という気持ちを心に抱き続ける」ことです。それこそが、将来「何のために生きるのか」の答えと言えるでしょう。

さて、先ほど紹介した文集『拓く』の作文に、「仲間と切磋琢磨し合って様々なことを乗り越えていきたいと思います。そして、卒業式の時には國學院栃木で三年間学ぶことができよかったですと思えるようにしたいです。その時、両親に成長した姿を見せられるように頑張っていきたいです」とありました。今、この時、校訓の「たくましく 直く 明るく さわやかに」を体現してきた皆さんは胸を張ってよいと思います。早朝や放課後遅くまで、教室や教育センターなどで集中して勉強する姿、職員室で積極的に質問する姿、部活動でも黙々と必死になって練習する姿、行事においても全てに全力で取り組み、特に「令和始動一國學院の新たなスタート」のテーマのもと行われた文化祭・体育祭では、盛り上がる中にも整然とした姿を見せてくれました。そして、元気に、時に笑顔でよく挨拶する姿や集会の時の真剣に話を聴く態度には、感激したものです。皆さんは、国栃プライドというものを、見事な形で後輩たちに引き継ぐことができたのです。

では最後に、私が入学式の時述べて初代学校長 佐々木周二先生の言葉を、もう一度皆さんに贈り、結びとしたいと思います。先生が若い頃病気を患い、学校の卒業がかなり遅れたり、ご両親を早くに亡くされた経験を語られた上で、生徒たちに訴えかけた一節です。「今日までそっと男泣きするような辛さと苦しみに何度ぶつかってきたことか。

その度ごとに、あの時も頑張ったではないか、と自分に言い聞かせては乗り越え、歩んできた。人生に泣くことはあっても負けてはならない。必ず踏み進んでほしい。人は困難を乗り越えるごとに一回りずつ大きくなっていく。大きな人生の幸せを目指すことは、大きな苦難を乗り越えることである」。以上、式辞といたします。

令和二年三月二日  
國學院大學栃木高等学校  
校長 青木一男